

# 望まれる 宗教者の姿

「あまり家族の前では、こういう話はできないんです」

まもなく東日本大震災より二年を迎えようとする二月、晴れに近いような曇り空なのに肌寒い昼下がりに、雄勝出身の年配女性がこのような前置きで話を始められました。津波で多くの家族や親戚が被害に遭い、尊いいのちが失われた中、一つの家庭で対面できた方と未だ行方不明の方がいらっしゃる状況では、それぞれの家族に配慮して、言葉を慎まないといけない場面が発生してくるとのことです。そういう方でもここなら話をしても良いかなあと考えて

いるのが、お坊さんの移動傾聴喫茶、カフェ・デ・モンク (Café de Monk) であります。もちろん、宗教的な相談ばかりに依拠することを強調されているわけではなく、僧侶を中心とした宗教者が運営している以外は、美味しいケーキと飲み物が用意された一般的な「お茶っこ」と何ら変わりありません。

この日は開成ささえあい拠点センターで催されましたが、前日、前々日のポスティング (カフェのご案内を各仮設住宅にお知らせすること) のおかげで、60人以上の住人さん達がお越しになりました。いつもながら、喫茶のマスターである金田諦應



筆者：森田敬史

師 (曹洞宗) のきめ細かい配慮と、どのようにすればその会が充実したものになるのかと常に検討し陰ながら実働される行動力には敬服致します。

実は、先の女性とは私自身、初対面ではなく、何度かのお出合いでようやく重い口を開いて下さったというのが実際であります。それほど口にするのもお辛いという感じだったので、そのような辛いことを話すためには、この人なら大丈夫だという信頼関係構築も必要であったのでしょうか。この日の会場がある開成団地では、他の集会所でも催しておられるため、何度か顔を合わせるといのはそんなに珍しいことではなく、場の雰囲気であったりそこでお手伝いをする宗教者のキャラクターであったりが見えやすくなってきているでしょう。

いつも仏教者やキリスト教者などの宗教者が多数協力しているカフェ・デ・モンクではありますが、この度のカフェ・デ・モンクは、いつも以上に多くの宗教者が参加しておりました。実は、今回は東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座と「心の相談室」が共催で実施されている臨床宗教師研修の一プログラムで、研修受講者が12名含まれていたからです。この研修については、研修案内の中に、次のように表現されております。



2月20日に石巻市開成仮設住宅  
カフェ・デ・モンクの様子

「臨床宗教師」とは、公共的な役割を果たす「宗教的ケア」の専門家であり、臨床宗教師研修は、宗教者としての全存在をかけて人々の苦悩や悲嘆に向き合い、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、公共空間で実践可能な「宗教的ケア」を学ぶことを目的とします。そのために、①「傾聴」と「スピリチュアルケア」の能力向上、②「宗教間対話」「宗教協力」の能力向上、③宗教者以外の諸機関との連携方法を学ぶ、④幅広い「宗教的ケア」の提供方法を学ぶ、の四点を習得することを目指します。（引用終わり）

同講座の設立趣旨として、実践宗教学寄附講座の公式サイト（<http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/top.html>）には、以下のように表記されています。

実践宗教学寄附講座は、2011年3月の東日本大震災以来、被災者の心のケアのために地元の宗教者、医療者、研究者が連携して行なってきた「心の相談室」の活動を踏まえて設立されたものです。

今回、東北の被災地では、宗教者による支援活動が活発に行われました。それぞれの宗教の立場をこえて連携し、支援活動が行われてきたことが一つの要因であると考えられます。その上で、さまざまな信仰を持つ人々の宗教的ニーズに適切にこたえることのできる人材が必要なのではないかという洞察が生まれました。この講座は、そのような専門職（仮に「臨床宗教師」と呼んでいます）の育成を行うために、地元の宗教界などの支援を受けて設立されました。

講座の設置期限はさしあたり3年間で、基礎研究を行ないながら研修プログラムを作成し、「臨床宗教師」の育成を目指しています。（引用終わり）

東北大学に開講されたのは、活動母体である「心の相談室」が宗教的中立性を確保するため、事務局を東

北大学大学院文学研究科の宗教学研究室に置かれた経緯があるからです。もちろん、国立大学にこのような講座が設置されたのは新しい試みであります。その講座を、特定の宗教に偏らない宗教者はもちろんのこと、宗教学者、ご逝去された岡部健ドクターのような医療者など何層もの専門職が運営に関わるという連携により支えられているわけでありませう。このような布陣から、宗教者による様々な活動に対する意見、特に布教のような分かりやすい形で認知されやすく、また警戒されやすい状況から脱することができるのではないかと考えられております。「心の相談室」は、もともと宮城県宗教法

いる最中でしょうが、昨年度一年間で二回の研修が実施され、合計24名の研修受講者が修了証を手に入れました。その24人の宗教者たちがそれぞれの現場に戻られ研鑽を積んでいかれると、公共空間で活動する宗教者のネットワークがどんどん広がっていくのではないのでしょうか。震災から一年が経過した2012年は、その礎となり得るであろう、まさに「臨床宗教師元年」と呼ぶにふさわしい一年になったのではないのでしょうか。岡部ドクターが掲げられた“医療と宗教”の連携を深めていくのに大きな契機となった一年となりました。

私自身は、ちょうど震災から一年後の2012年3月11日にご縁を頂き、



南三陸町で行われた行脚

人連絡協議会の事業として、仙台市営葛岡斎場において震災犠牲者（身元不明者を含める）の月例合同慰霊祭（お弔い）を執り行ったことをきっかけにして発足しました。この葛岡斎場において、読経ボランティアと並行して相談窓口を開設して常時様々な教団の宗教者がその場に「居る」という場を作り出しました。その後、宗教界の各団体から寄附金が寄せられ、自分の教団にその身を留めない公共性が担保された臨床宗教師を養成しようと、東北大学に働きかけられ開設されたのが、実践宗教学寄附講座というわけです。

このニュースレターをお読み頂く頃には、第三回の研修が実施されて

前述した仙台市営葛岡斎場における合同慰霊祭（お弔い）に司式としてお勤めさせて頂きました。そのご縁を繋げて下さったのが、同日、私の脇にてサポートして下さった東北大学の谷山洋三准教授でありました。その参列者の中に、壮大な構想をこれほどまでに現実のものとして実現された岡部ドクターの姿がありました。個人的には、それほど深く関わることが叶いませんでしたが、初対面の私に対して、ご自身の宗教者に対する考えを惜しみなく披露されていたのが、今でも鮮明に思い出されます。医療者が宗教者に対して、宗教者にしかできないことを望まれている場面に遭遇するのは、以前病院

に勤務していた際に、ご縁を頂いたドクターに次いで二度目の体験でありました。わが国の医療界では希有な存在かもしれませんが、誰の視点に立って医療を進めていこうとするかを考えるのであれば、すごく心強い信頼の置ける医療者ではないかと感じています。

それからちょうど一年後の2013年3月11日も機会を頂き、お吊いの参列者としてお勤め致しましたが、そこには岡部ドクターはいらっしゃいませんでした。これも時の流れを感じる一つのきっかけかなと回想致します。仏教者として思うところは、この世のあらゆるものは生じたり無くなったりすることで、姿や形、本質的な要素まで変化し、永遠に変わらないものはないという考え方である“諸行無常”という言葉であります。それぞれが主観的に感じる“とき”の流れの中で、我々は“いのち”を授かっているわけです。それぞれの変化に一喜一憂しながらも日々の生活に身を置いていることになるのでしょうか。そこで思うことは、変わるものもあれば、変わらないものもある、いやむしろ変えてはいけなれないものがあると表現するのが良いかもしれません。それが、刻一刻と時が流れている中で、細々とでも継続させていくべき宗教者としてのスタンス、特に東北三県への関わりではないでしょうか。僅かばかりでしたが、仮設の住人さんと関わりをもたせて頂く中で、私自身が感じたことであります。何より丸二年を過ぎて、被災者支援が終わったようにすら感じてしまう現状の中で、長期的に必要とされ、声高に叫ばれても良いはずの“こころ”に関する諸問題に対して、細くても継続した形で関わることを求められております。そのような状況において、東北大学で宗教者の育成が継続されることは、本当に大切にすべき活動であると思われま

そのような不思議な多くのご縁を頂き、私自身は2012年4月に東北大学大学院にて宗教学を学びながら、東北ヘルプ（仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク）のスタッフとして『諸宗教間連携担当』というお役目を頂くことで、前述した様々な活動のほんの一部を陰ながら応援させて頂きました。そのような立場であったため、とても多くの繋がりを頂いたことは、至極大きな財産になったと考えています。一年間という短い期間ではありましたが、そこで経験させて頂いたことは本当に意義深いものでありまして、この場を借りて、東北ヘルプ・事務局長の川上直哉先



2月20日・石巻市 統禅寺で行われた臨床宗教師研修の講義風景

生をはじめとする諸先生方に深く感謝を申し上げる次第であります。とりわけ仏教者である私自身が、大きな括りでキリスト教連合という組織に属していることがまさしく公共空間で活動する宗教者を経験させて頂いているのではないかと、光栄に思ったことであります。貴重な経験を通して、私なりに考えるところは、宗教者であっても一人の人間として、人と関わること自体は特に垣根がないということでした。目の前で苦しんでおられる人がいれば、寄り添う心を持ち合わせているのは、どの宗教というものに限ったことではないでしょう。それを実感できたことは、宗教者としての自分を振り返る上で、何よりの収穫であり今後の財産になったと思います。それは、宗教的儀礼

に関しても感じるどころでありました。東北ヘルプのスタッフとして参加した朝礼の際に、讃美歌のやわらかな雰囲気が始まる一日は、それまでの仏教者として勤務していた病棟での読経が始まる一日とはまた違う新鮮な始まりでした。それでも特に違和感を覚えることなく、心を落ち着かせる自分自身にとって大切なひとときであったことを思い出します。そして、スタッフとして勤める最終日に、東北ヘルプの朝礼を担当する機会を与えて頂きました。不思議と抵抗なく、それでも一言お断りをして、日常儀礼として読誦しておりました般若心経をお唱え致しました。そこで、それぞれ媒体や作法のスタイルが違っていても、そこに“在る”宗教的な“こころ”は同じなんだという確信を得ました。

これまで雑駁に述べてきました活動は、ある意味で、宗教界において新しいムーブメントとして注目されていますが、一方で東日本大震災を契機として、もともと潜在的にあった社会的ニーズが単に顕在化したに過ぎない諸事象の一つ

ではないかと冷やかに捉える見方もあります。しかし震災後に、被災地において宗教者の存在を切望している話を伺うことが多く、それを受けて、様々な教団の多くの宗教者がボランティアとして“現場”に入られています。ここにきて、宗教者でなければできないことが注目され、改めてその存在意義を見直す流れが作り出されているのは、宗教界にとって大きな転機ではないでしょうか。祈りや読経などの宗教的儀礼や、数珠やロザリオなどの宗教的資源はもちろんのこと、宗教者自身の存在がそれだけで救いになるという、まさに宗教者の真骨頂というべき尊い役割を担うべく、それぞれの働きが拡充することを一宗教者として自戒の念を込めて望みます。